

小学校の授業に関する学校心理学的研究

授業における教師の4種類のサポートを中心として

茨城県教育研修センター 山口 豊一

本研究では、小学校の児童及び教師を対象に児童の援助ニーズと教師のサポートに関する調査を行い、道具的援助に関するニーズやサポートが多いことが分かった。そこで、その結果を踏まえ、学校心理学の視点から、一次的援助サービスの在り方を究明した。特に、教師と児童、児童相互の人間関係を生かした授業を中心として実践的研究を進めた。その結果、授業における教師の4種類のサポートが学習意欲等を高めるのに有効であることが明らかになった。

キーワード：学校心理学，援助ニーズ，4種類のサポート，一次的援助サービス，人間関係

問題

今日、生徒指導の諸問題には、いじめをはじめ、不登校、非行や校内暴力、学級崩壊などさまざまな問題があり、今や、これらの問題状況は、どの児童や学校にも起こり得るものと思われる。核家族化や少子化の進行、地域社会の変化に伴う連帯感の希薄化など、現在の社会は様々な問題を抱えている。そうした社会状況の中で、児童については、価値観の多様化、人間関係づくりの未熟さ、生活体験の不足等さまざまな問題が懸念されており、これらが諸問題の背景に複雑に絡み合っていることが考えられる。このような現状において、児童の学校不適応に対する適切な指導・援助をはじめ、一人ひとりの児童及びその保護者への望ましい対応の在り方を見いだすための教育相談の充実が叫ばれている。

生徒指導の重要な役割は、一人ひとりの児童の人格を尊重し、個性の伸長を図りながら、同時に社会的な資質や行動を高めることである。その中の、学校教育相談は、すべての児童を対象とした成長への援助活動である。今日の社会を考えると、学校教育相談が極めて重要な役割を果たすと考えられる。児童一人ひとりには、一人の人間として成長への可能性をもっている。児童にかかわり、受容し、内面から理解しながら、一人ひとりのニーズに応じることができれば、成長への援助ができると考える。このことを基盤にして、教育

相談的配慮を基に人間関係を生かした授業を実践することにより、教師と児童及び児童相互の人間関係が良くなり、児童が自分で課題を見つけ、自ら考え、自ら問題を解決していく資質や能力、豊かな人間性、そして、たくましい体と健康を培い、「生きる力」を育成するよう指導・援助することが可能であると考え（茨城県教育研修センター教育相談課，2000）。

ところで、人は関係（環境）によって変わる（田上，1999）と言われるように、親子の関係、教師や友人との関係、さらには学級の雰囲気や人間関係が、児童の学習や人間形成に与える影響は大きい。学級では、学級担任と児童との人間関係が源泉となって、学級の雰囲気が醸成される。とりわけ教師の受容的な態度は児童との間に民主的で、相互理解的な関係をつくり、さらに、信頼と尊重の関係を浸透させていくようになる。このような関係の中で、児童は助け合い、協力し合い、問題を解決したり、考えを深め合ったりすることができる。

そこで、教師が一人ひとりの児童と、どのような関係をもとうと努力するかが課題となってくる。児童は、その程度の違いはあるにしても教師に認められたい、好かれたいという願いをもっている。「先生に認められている、好かれている」と意識している児童は、学校生活に対して積極的、意欲的であるが、反対に「認められていない、嫌われている」と意識している児童は、学校生活に対して投げやりであったり、反抗的で

あったりする。

人間関係は相互関係であるから、教師側からの見方、かかわり方だけでなく、児童が教師をどう見ているか、どうかかわろうとしているかについても、たえず探りながらかかわり方について工夫していくことも大切である。そして、児童の欠点や問題点にのみ目を向けるのではなく、小さな努力や工夫、成長などに目を向けてかかわろうとすることである。このようなかかわり方の中で、児童は自己受容や自己理解へと進むことができる。これを学校生活の中で、児童と教師、児童相互の関係に生かすことによって、集団の相互作用がますます高まることになると考える。また、一人ひとりの内面に心を傾け、共感しようと努力し、その場・その時の子どもの気持ちを十分に理解した個別的なかかわり方によって、児童の思考や表現活動が活発に展開され、さらに意欲的・主体的な学習活動が展開されるようになると考えられる。

そこで、本研究では次の2点を明らかにする。

授業における教師の4種類のサポートの実態を、児童と教師との二側面から明らかにする。

教師の授業における4種類のサポートと児童相互の人間関係作り、教師と児童の人間関係作り、学習意欲との関係を、授業実践から明らかにする。

研究 1

1. 目的

教師が児童一人ひとりの援助ニーズに応じるためには、児童の援助ニーズがどのようなものであるかの確に把握する必要がある。

そのために、授業における教師の4種類のサポートの実態を、児童と教師との二側面から明らかにする。

2. 方法

調査対象 茨城県内の公立小学校（11校，422名，4・5・6年生）の児童及び11校393名の教師を対象に授業における教師の4種類のサポートの実態の調査を行った。

調査方法 作成した「児童用質問紙」では、「授業の進め方や態度で『いいな』と思ったこと」、「授業の進め方や態度で『いやだな』と思ったこと」、「授業について思っていること」を自由記述で尋ねた。また、「教師用質問紙」では、授業の中で「子ども相互の人間

間関係を作る」、「教師と子どもとの人間関係を作る」、「子どもの学習意欲を高める」ための配慮や工夫を自由記述で尋ねた。

調査時期 1998年8月～9月にかけて実施した。

分析方法 得られた自由記述の回答を4種類のサポートに分類・検討した。なお、4種類のサポートそれぞれに、援助的なものと非援助的なものを含めた。

3. 結果と考察

児童の授業に関する自由記述を分析すると、図1のように児童が「いいな」と最も多く支持しているのは、

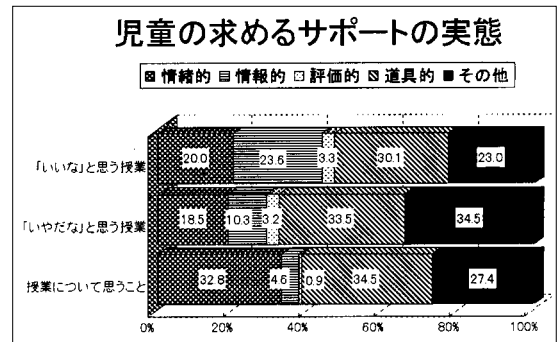


図1 児童の求めるサポートの実態

「グループ学習をすること」、「授業の中で実験や作業をさせてくれる」等の道具的サポート(30.1%)であった。一方、「いやだな」と最も多くの児童が拒絶しているのは「授業を進めるのがはやい」、「黒板の字が読みとれない」等のネガティブな道具的サポート(33.5%)であった。授業について「思うこと」では、「他のクラスと交流がしたい」、「自由に活動する時間が欲しい」等の道具的サポート(34.5%)であった。なお、いずれの質問に対しても評価的サポートの記述が少ない。これは、教師の指導・援助に適切な評価的なサポートがなされていないことによるものと考えられる。

以上のことから、児童は授業において道具的サポートを中心に求めており、児童不在の授業形態、例えば授業の進め方がはやい等には不満を持っていることが明らかになった。

次に、教師の授業における配慮に関する自由記述を分析すると、図2のようになる。児童相互の人間関係づくりへの配慮では、「グループ活動」、「学習形態・座席の工夫」等の道具的サポート(52.9%)を実施している教師が多かった。教師と児童との人間関係づく

りへの配慮では、「児童の発表はすべて肯定的に受け止める」、「間違ってもいいという安心感を持たせる」等の情緒的サポート（49.6%）が最も多かった。学習意欲の向上への配慮では、「活動計画・教材の工夫」、「視聴覚機器の活用」等の道具的サポート（85.5%）が最も多かった。

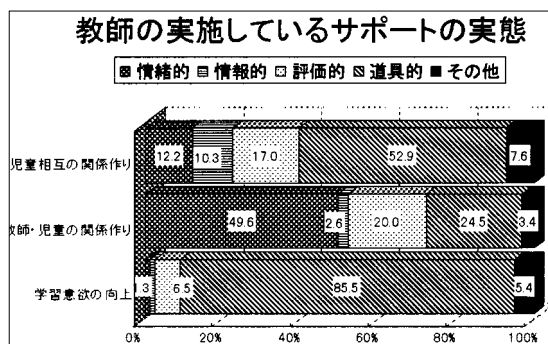


図2 教師の実施しているサポートの実態

以上のことから、児童相互の人間関係づくりや学習意欲の向上に関しては道具的サポートを行っている教師が多く、他方教師と児童との人間関係づくりでは、情緒的サポートを行っている教師が多いことが明らかになった。

研究 2

1. 目的

教師が授業の中で4種類のサポートを行うことで、児童の一人ひとりの援助ニーズに応じることができる。

そこで、授業における教師の4種類のサポートと児童相互の人間関係作り、教師と児童の人間関係作り、学習意欲との関係を明らかにする。

2. 方法

小学6年生の授業実践を観察及び授業結果から分析する。その際、学校心理学の4種類のサポートの視点から分析する。

3. 分析の視点

授業における教師の4種類のサポート

教師の児童に対する態度や活動は、一人ひとりの児童の学習を成立させていくうえで根幹をなすものである。そこで、授業の中で達成感や成就感を味わうことができるような児童に対する4種類のサポートを考え

てみる。この4種類のサポートは、教師が児童に「何を」提供するかという教師の行動による分類であり、情緒的サポート、情動的サポート、評価的サポート、そして道具的サポートがある。

ア 情緒的サポート

教師が味方として側にいることで、児童を安心させ勇気付ける。それは、児童が伸び伸びと積極的に活動することにつながる。情緒的サポートの例として、教師が共感的に情緒的な声かけをする（「大丈夫だよ」「どうしたの」等）、児童の発言や発表を傾聴する、一人ひとりの活動を認める（「がんばったね」「ありがとう」等）などがある。情緒的なサポートを心掛けて授業を行っていけば、児童は学習活動に取り組む姿勢が意欲的・積極的になると考えられる。

イ 情動的サポート

児童の学習場面などで必要とする情報を提供することである。児童の知りたい情報をきちんと正確に把握し、必要に応じて提供することが学習意欲を高めると考えられる。教師は、何度も同じつまづきを繰り返している児童、学習が不十分な児童、助言を求めてくる児童に対して、必要とする情報を提供することは大切である。教師が授業中に情報提供を意図的に行うことで、一人ひとりの学習に深まりが期待できる。

例えば、「授業で指名して答えられないときヒントを出す」「学習の仕方を教える」「繰り返し説明する」等は情動的サポートである。

ウ 評価的サポート

学習者の学習という行動が行われたならば、その結果について正しい行動が行われたかどうか、教師の側からフィードバックをする必要がある。行動のどこが優れているのか、どこに間違いがあるのかなどについて、教師が児童に知らせることによって、児童はそれを手掛かりとして自分自身で行動を修正したり、発展させたりできるようになる。留意すべきは、教師の評価の対象は子どもの行動であり、子ども自身（人格）ではないということである。評価的サポートとして授業でよく使われているのは、「君の発表は分かりやすい」「君のノートはよく整理されているね」などである。

エ 道具的サポート

児童に対する具体的な実質的な支援のことであり、それぞれの活動場面において、児童の思考を支える教具としての観察カード、ヒントカード、検討カード、

見通しカード等の提供, また, 学習形態, 座席, 環境調節なども道具的サポートである。道具的なサポートをすることにより, 児童は「先生は気持ちを理解してくれている」「やってみよう」「頑張ってみよう」「自分でもできるかな」などと感じ取り, 授業に取り組む姿勢が意欲的・積極的になると考えられる。

以上, 4種類のサポートについて述べてきたが, 重要なことは, 児童がどのようなサポートを求めているのかを教師が十分把握しておくことである(山口・石隈・横島, 1999)。

例えば, 「子どもはいつでも自分の全体を温かく包んでくれること(情緒的)を望んでいるわけではない。ある時にはこれはうつつしいものである。きちんとした情報だけを得て(情報的)失敗しても自分でやってみたいときもある」(大野, 1995)のである。

4. 実践

特別活動(小学校第6学年 学級活動)
—インターネットを活用して, 児童相互に信頼感を高める学級活動—

題材 「自分の学校と土浦を世界に紹介しよう」

題材について

ホームページの作成に当たっては, 9月から児童が自分で興味を持って集めた各データや資料を使ってまとめる。個別にまとめていく資料をお互いに公開, 交換しながらまとめていくことで, 全体として高め合う活動に役立てたいと考える。

コンピュータの活用について

コンピュータ活用に当たっては, 次の3点は, 児童が活動する上で特に配慮したい。

- ・ホームページの作成内容が, 児童自身の手で発見したり, 選んだりすることができるものであること。
- ・児童の力で話し合いが進められ, 見通しがもてるような活動計画になること。
- ・児童の活動時間や場所を確保すること。

児童の実態(男子14名 女子16名 計30名)最高学年としての自覚を持ち, いろいろな場面で力を発揮している。明るく穏やかな児童が多く, 普段の生活でも友達と協力しようという雰囲気が見受けられる。グループ学習や係等の活動でも, 比較的スムーズな話し合いと協力した活動ができる。

学習形態

自分の考えを出すとともに, 友達のよい考えを取り

入れながら, 自分達のめあてにそったホームページを作成できるように, グループ学習を取り入れた。

本時の学習

ア 目標

・一人ひとりが自分の考えを出し合い, 友達のよい考えを取り入れながら, 自分のめあてにそったホームページを作成することができる。

・ホームページ作成を通して, 友達の長所を見つけ, その存在を見つけることができる。

イ 準備・資料 コンピュータ, 各種データ, 資料, 励ましカード, がんばりシール

ウ 展開(次ページ参照)

結果と考察

ア 結果 意識調査(1999年9月18日, 1999年10月31日実施)から

本授業の前後に, アンケートによる意識調査を行った。級友との関係について(4項目), 教師への信頼について(8項目), 学習への意欲について(8項目)の合計20項目について, 5件法で調査した(表1)。

表1 授業前後のアンケート調査の質問項目

質問領域	質問項目
級友との関係	みんな楽しく学習している 他人の失敗を冷やかさない 授業中親切にしてくれる 教え合っている
教師との関係	ほめられるとうれしい 失敗してもはげましてくれる 授業中丁寧に教えてくれる 質問しにくい 間違いも丁寧に教えてくれる 誰にも公平である 発表を聞いてくれる 優しく思いやりがある
学習への意欲	学校の学習が楽しい 指名されないかと不安にならない 考えをよく発表する わからなく不安にならない 嫌いな教科もあきらめない 一生懸命勉強する あきらめの気持ちない わからないときそのままにしない

ウ 展開

表2 本時の学習活動と教師の援助活動

時間	学習活動・内容	教師の児童へのサポート	
		道具・情報	情緒・評価
前 2 分		<ul style="list-style-type: none"> 児童とともに学習の準備をする。(道具) 	<ul style="list-style-type: none"> 児童の様子を観察し、気にかかる児童には声をかける。(情緒)
2 分	1 本時の活動のテーマを確認する。	<ul style="list-style-type: none"> テーマを確認すると同時に、グループで協力することと、個人の意見を大切にして学習することが大切であることを一人一人に理解させる。(情報) 	
15 分	2 グループごとにどんなホームページにするのか話し合い、作成活動を始める。 <ul style="list-style-type: none"> 家庭, 学校生活 土浦の歴史, 文化 その他 	<ul style="list-style-type: none"> ホームページの内容はテーマにそったものなら自由に作成できることを確認してから活動をするように伝える。(情報) 自分で用意した資料の活用について助言する。(情報) 	<ul style="list-style-type: none"> 自分で用意した資料をもとに、ホームページ作成を進めているかどうか観察し、感想をフィードバックする。(評価)
10 分	3 ほかのグループの作品を見て回り、友達の気づきのよいところを見つける。 (1) 友達の作成したホームページを見て、よいところを見つける。 (2) 友達の作品のよいところをカードに書き込む。 (3) 気づきのすばらしいホームページには、カードにシールを貼る。	<ul style="list-style-type: none"> 友達の作品をみる視点を意識づけるため、自分たちが真似したい作成法を見つける。作品を見て、よいと思ったところをカードに書く。(道具) 作品の中に自分が気づかなかったものがあつた場合には、作品カードに「がんばりシール」をはる。(道具) の3点に注意しながら、作品の見学をさせる。 教師が、作品の特徴を児童の隣で解説することで作者の意図を理解してもらう援助とする。(情報) 	<ul style="list-style-type: none"> 児童と一緒に比較検討しながら、友達の作品のよいところを見つけた児童を賞賛する。(評価) 友達の作品のよい点、苦労した点、協力し合って仕上げた点に気づいているかを観察し、感想をフィードバックする。(評価)
13 分	4 自分の作品を見直し、修正する。	<ul style="list-style-type: none"> ホームページに出ている写真だけでなく、説明文の内容にも注意するよう助言する。(情報) 比較検討で得た情報をもとに自分達が応用したいことを話し合い、自分の作品に生かせるように援助する。(情報) 	<ul style="list-style-type: none"> 一緒に作品カードを読みながら、ホームページ作成の過程で苦労したことをねぎらう。(情緒) 話し合いをもとにした作品の校正、編集をしているか観察し、フィードバックする。(評価)
3 分	5 自己評価をする。	<ul style="list-style-type: none"> カード記入の時間をつくる。(道具) カードを記入しながら、友達と一緒に協力することの大切さや友達の存在を認めることの大切さを確認する。(情報) 	<ul style="list-style-type: none"> 否定的意見が書いてあるカードのグループには、教師が補説して、作品のすばらしさをフィードバックする。(評価) 友達の意見や作品を考慮してホームページの作成をすることができたかを観察し、気づいたことを伝える。(評価)
2 分	6 先生の話聞く。	<ul style="list-style-type: none"> 相互評価で人気のあつたホームページを紹介しながら、協力して仕上げることの大切さの話をしてまとめとする。(情報) 	
後 3 分			<ul style="list-style-type: none"> 作成したホームページを児童とともに鑑賞しながら、よく頑張ったねと声をかける。(情緒)

各項目の質問に対して、「はい」を5点、「まあまあ」を4点、「どちらとも言えない」を3点、「どちらかと言えばいいえ」を2点、「いいえ」を1点として平均点を求めた。また、図3は各項目ごとにその平均値をグラフ化したものであり、図4は質問を領域ごとにまとめ、その平均値をグラフ化したものである。

全ての項目全体の平均は、授業前が3.35、授業後が3.71であり、1%水準で有意な上昇が見られた。20の質問項目の中で、有意な上昇が見られなかったのは、「学習への意欲」領域の「学校の学習が楽しい」、「考えをよく発表する」の2項目だけであり、他は全て有意な上昇が見られた(図3)。次に、領域ごとについて見てみると、3つの領域ともに授業前後で平均値が上昇しており、「教師との関係」、「級友との関係」、「学習への意欲」それぞれ有意な上昇が見られた(図4)。

イ 考察 4種類のサポートの視点から

【道具的・情動的サポートの観点から】

- ・児童には、9月から学習内容を予告(情報)しておいたので、興味を持って集めた各種データや資料を有効に活用することができた。励ましカードの活用(道具)については、友達によさや伸びを認め、積極的にプラス面を書き込んでいる児童が多く見られた。また、思うようにホームページ作成がいかなかった場合でも、友達の励ましカードのおかげで次の活動の場へ生かすことができた。
- ・授業の中で、友達の作品を比較検討する機会(道具)が多くとれた。教師がすることで友達のよいところを自分のものに修正してまとめる児童が見られた。

【情緒的・評価的サポートの観点から】

- ・ホームページの作成作業中に、友達の中に入って一緒に触れ合ったり、お互いに何でも話し合える雰囲気づくり(情緒)をすることができた。児童は、自分達の作品を教師や友達に見てもらい感じたこと等を言ってもらうこと(評価)により、自分の学習作業に自信を持つことができた。
- ・個別にまとめていくものをお互いに公開しながらまとめていく際、教師が「良い点」を認めること(評価)で、児童がお互いに自信や信頼感を高め合う活動に役立てることができた。

【児童の様子から】

- ・授業を実施した後のほうが、集団で何かをする喜びを

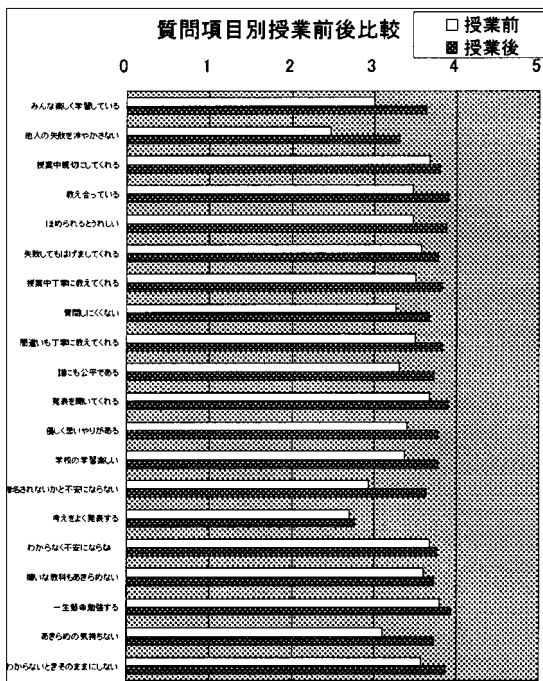


図3 質問項目別授業前後比較のグラフ

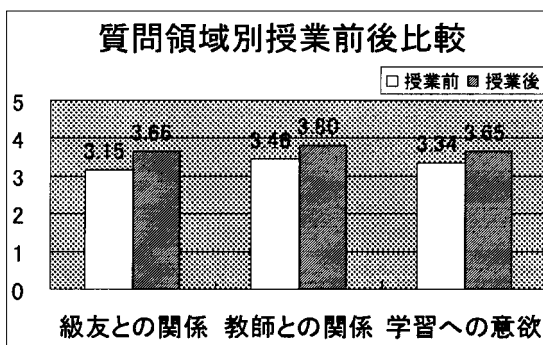


図4 質問領域別授業前後比較のグラフ

感じているようである。

- ・級友との関係では、支持的な学級の雰囲気づくりができてきたと考える。
- ・学級への関心では、児童は、自己存在感が感じられるようになり、学級の一員としての認識を深めたと考える。
- ・学習への意欲では、児童が自己の生き方を冷静に見つめ、新たな目標に向かって進もうという意欲が喚起され、自分で学習課題を定められるようになった。

総合考察

本研究は、研究 では、児童は主に道具的サポート

を求めていることが分かった。一方、教師は児童相互の人間関係作りと学習意欲の向上への配慮においては、道具的サポートを実施しているが、教師と児童との人間関係作りにおいては、情緒的サポートを実施していることが明らかになった。

また、教師は児童相互の人間関係作りと教師と児童との人間関係作りでは、評価的サポートを行っているが、実際児童の評価的サポートに関する記述が極めて少なく教師と児童との間にズレがある。このことから教師の評価的サポートが有効でないこと、適切でないことが窺える。教師は適切な、積極的に言い換えれば児童の援助ニーズに応じた評価的サポートをすることが望まれる。

次に、研究 から、教師の4種類のサポートが、児童相互の人間関係作り、教師と児童の人間関係作り、学習意欲の向上に有効であることが分かった。4種類のサポートにより、児童は安心感を得られ、教師と児童の人間関係、児童相互の関係も深まって、そして学習に対する取り組み方が積極的になると考えられる。つまり教師が児童の援助ニーズを的確に把握し、その援助ニーズに応じて4種類のサポートを積極的に取り入れることで、授業において人間関係をさらに深めることができ、児童は授業を楽しみに待ったり、協力的・積極的に取り組むようになるのである。

さらに、実践を通して、教師のサポートを4種類に分類することが困難であり、「道具的・情動的サポート」、「情動的・評価的サポート」の2種類のサポートに分類しやすいことが明らかになった。これは、前者で例を述べると、ヒントカードを児童に渡す(道具)とき「これのここを参考にするといいよ」のように助言(情報)も同時に与えるのが通常だからである。また、後者について言えば、「きみの発表は図が使ってあってとても分かりやすいね」とフィードバックする(評価)と、それは同時に情緒的サポートも行っているという結果になるということである。

課題としては、一つに、中・高等学校での授業における教師の4種類のサポートの実態を、生徒と教師の二側面から明らかにし、その有効性を授業実践から究明すること。二つに、援助ニーズの高い児童生徒への二次的援助サービス、三次的援助サービスにおける4種類のサポートの在り方の究明が残る。

(実践協力者 土浦第二小学校 久保田 憲)

引用文献

- 茨城県教育研修センター教育相談課編 2000 教育相談の研究第9集 茨城県教育研修センター
- 石隈利紀 1999 学校心理学 教師・スクールカウンセラー・保護者のチームによる心理教育的援助サービス 誠信書房
- 菅野 純 1990 子どもの見える行動・見えない行動 - ふれあい学校カウンセリング 瀝々社
- 國分康孝 1992 構成的グループ・エンカウンター 誠信書房
- Maslow, A. H. 1962 Tward a psychology of being. (上田吉一訳 完全なる人間 誠信書房)
- 大野精一 1995 学校教育相談の領域と方法 高校教育展望10月号 小学館, Pp.36-39.
- Rogers C. R. 1956 On interpersonal relationships. (畠瀬稔編訳 人間関係論 岩崎学術出版)
- Rogers C. R. 1980 A way of being. (畠瀬直子監訳 人間尊重の心理学 創元社)
- 田上不二夫 1999 実践スクールカウンセリング 金子書房
- 山口豊一・石隈利紀・横島義昭 1999 第32回日本カウンセリング学会論文集, 271-272.
- 山口豊一・横島義昭・石隈利紀 2000 第42回日本教育心理学会論文集, 192.
- 山内隆久(編) 1988 人間関係入門 ナカニシヤ書店

A School Psychological Study on Supporting Elementary School Students in Class : From the Aspect of Four Kinds of Support by the Teacher in Class

Toyokazu YAMAGUCHI

In this study, a survey was implemented to elementary school students on the support needs in school and it was found that there were a lot of needs of instrumental support. Then regarding the survey result, it was examined from the perspective of school psychology how teachers should give

primary support services to them. The study was conducted especially by teaching students in class making use of the good relationships between teacher and students, and among students. As a result, four kinds of support by teachers in class were found to be effective in motivating students to

learn.

Key words : school psychology, support needs, four kinds of support, primary support services, good relationships

(2001年4月8日受理)